特集　「国境」によせて

『史林』第八八巻第一号が、「歴史学の現在　二〇〇五」という特集を組んだのは一昨年（二〇〇五年）の一月であった。歴史研究を広い裾野をもつ総合的な学問と捉え、各分野の研究者の相互理解を活発にすること、さらには問題意識や分析手法についても領域を越えて関心を突き合わせる場を提供するという趣旨であった。昨年「歴史学の現在　二〇〇六」を引き続き編んだが、本特集「国境」も、その趣旨の延長にある。近年の歴史研究は、分野を異にするとまったく対話が出来ないほどに、いたずらに狭い領域に蛸壺化してはいないか。視野を広げた議論によって閉塞状況を打ち破ることを目指している。

あわせて本巻特集にはいま一つの企画が加わっている。史学研究会はかつて例会をもつことを常とした。その時々、多くの研究者が関心を持つ熱いテーマに関して討論したばかりか、世界史の時代区分あるいは地域区分をいかに考えるかという大テーマに関しても、先達たちは研究を寄せあっていた。その種の密度の濃い研究会を復活させたいと準備をすすめた。幸い、各位の協力を得て、二〇〇六年四月二二日、京都大学文学部において「国境」を共通テーマとして例会を開催した。二〇〇名に近い参加者をえる、盛会であった。本特集は、そのときの報告者と、当日コメンテーターを務めた二人の方の寄稿によって構成されている。

ちなみに例会開催時の企画を、共通テーマ「国境」にからめて簡単に紹介しておこう。報告した七名は、歴史・考古学・地理学研究に携わるとはいえ、専門としては時代も地域も離れており、日常接触を持たない。企画者が意識的にバラバラの人集めをした結果である。共通テーマ「国境」にそって、おのおのの分野で関わりのある演題があればどのようで

もよい、それぞれが報告を持ち寄ろうと依頼した。歴史研究の新しい切り口を探るには、多少はちゃめちゃな、そのような企画もおもしろいという主催者側の勝手な思いこみをこめた申し出である。さぞかし迷惑な提案であったにちがいないが、ご快諾いただいた報告者には改めて深謝申し上げたい。

それでは、四月二二日の例会から何か新しいものがみえたのか、そう聞かれると、近年加齢とともに感性の劣化がひどい私の場合は、はなはだ心許ない。この種の企画からえる成果は、当日の議論を聴衆の一人一人が多様に受け止め、それぞれに新しい問題を温めていくことだ、と逃げたい。ただ、そのようないい訳だけではあまりに無責任なので、三点だけ記そう。例会の議論を聞き、歴史研究者として「国境」を考える場合におもしろいなと感じた点である。一。主催者によれば、共通テーマ「国境」は「こっきょう」とも、また「くにざかい」とも読んでよいという。ようするに、人類の歴史を通してみれば、「さかい」は何かの共同体が生まれる段階から必ずあったに違いない。そうした意味で、おそらくは多様な歴史的かたちをとった「国境」の実態を、各地域の政治文化・経済、社会、地勢のあり方などを考慮して、まず事実として確認し、比較してみるとおもしろそうだ。自然の「さかい」なども含めて、いろいろな「国境」があったに違いない。そして近代ヨーロッパの主権国家だけが、国境にこだわる唯一の存在ではなかったことも明らかになるだろう（本特集古松論文参照）。

二点目は、国境が、中心部からみれば周辺、もしくはマージナルな、他者との「さかい」であることに係わる（周辺というより、軍事的な意味での先端かもしれないのだが）。いずれにせよその周辺にも人びとが「面」（地域）として住んできた。その人びとは、区切られた「さかい」をどのように意識して生活をしたのか。区切りを越えて活動する人や物の流れもあったに違いない。つまり「さかい」にすむ彼らの社会や文化には、おもしろそうな問題がたくさんありそうである。たとえば、特定地域が地勢的理由などでたえず「さかい」としての周辺に追いやられる状況があったとすれば、その周辺性は地域住民の心性や歴史にどのような現れ方をするのか。本特集で山﨑論文などが扱う問題であるが、その点にも惹かれる

ものを感じた。

第三は、一、二を含める広い問題である。そもそも「国境」を組織するということは、その国あるいは共同体にとってどのような意味を持つことなのか。おそらく国境の組織の仕方は、国の統治の方式、政治的性格さらには社会・経済的動態などと密接な連関性をもつのではないか。そのように考えると、国境の有り様を通して、それによってくくられた社会の性格なり、国家の特徴を考えることも出来るように感じた。多少思いつきのたぐいであるが、国家を考える場合に、さらには「国境」そのものを考えるうえでも、それなりに検討してよい問題のように思う。

以上の三点である。例会まで、それほど真剣に考えたわけではないこのような問題が頭に浮かんだだけでも、四月二二日の会は私にとって心地よい集まりであった。本特集をお読みいただく読者のご感想はいかがであろうか。いずれにせよ本特集が多くの読者にとって刺激的であることをこころから願っている。

二〇〇七年一月

史学研究会前理事長
紀　平　英　作